

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

二〇〇六年も後半のことだったと思う。

「生き方論」などで定評のある雑誌から、原稿の依頼があった。「ストレス解消の秘訣^{けつ}」といったテーマで二〇〇〇字という短い分量だったので引き受けることにし、締め切り日に原稿をメールした。構成は、「ストレスとは何か」という定義に続けて「ストレスが生まれる理由」を簡単に説明し、それに続けて「解消のために気をつけること」を三つほど書く、というごく常識的なものつもりだった。

ところが、すぐに編集者から「書き直し」を依頼する返信が来た。

「いただいた原稿に問題がある、というわけではありませんが、こういった構成だと全体を最初から順に読まなければならず、途中で読者が飽きてしまう可能性があります。前半の定義や解説はすべて省き、解消法の部分だけを箇条書きにして、ちよつとした説明とともに書いてください。なお、解消法は三つではなくて、六つくらいお願いします」私は、自分が原稿の分量を間違ったのではないか、とあわてて依頼書を見直した。「解消法を六つと解説」ということは、一二〇〇字ではなくてその一〇倍だったのではないか、と思ったのだ。

A 依頼書には、明らかに一二〇〇字と書かれている。ということは、ひとつの項目の解説は二〇〇字程度。

二〇〇字といえば、当然のことだが四〇〇〇字の原稿用紙の半分であり、短い文をふたつか三つ、書いただけで終わってしまう。

¹「それでいいのだろうか」と思いながら、もう雑誌の発売日も近づいていたので、私は言われるがままに、その原稿を「さあ、ストレスを解消する六つの方法について、教えてください。まずその一……」と説明はほとんどなしに具

体的な解消法から始めた。

B

「その一 すんだことはクヨクヨ考えない」という項目だけでも一行消費されてしまうので、説明部分には、「クヨクヨ考え込むのは、実は人間にとつての最大のストレスです。イヤなことがあっても、温かいお風呂に入つて布団にもぐり込み、楽しかった思い出などを振り返って眠るようにしましょう」程度のことしか書けない。なぜ、クヨクヨ考えるのがストレスになるのか、なぜ風呂に入るのがその解消に役立つのか、については、いっさい触れられない。

²「これでいいのだろうか。これじゃ原稿というよりは標語みたいではないか。さすがに読者は、こんなの信用できない」と思うのではないか」と思いながら、書き直した原稿をメール送信した。すると、今度は編集者からすぐに「こちらの意図を汲み取り、
X

³目二〇〇字で本当にいいのだろうか」と思いながらも、編集者が言った「それ以上長い、起承転結があるような原稿は読者に読まれない」ということばが気になった。

そのあと、女性雑誌の編集に長くかかわっている知人にこの話をしたら、「そんなの、あたりまえじゃないの」と一笑に付された。

「私も一五年間、この仕事をしているけれど、昔はライターさんにひとつのテーマについてほしい八〇〇字を目安に原稿を依頼していたんだけどね。その頃は、人がひと息で読めるのは八〇〇字、と言われていたから。

それが今は、『ひと息は二〇〇字』が常識になっているの。それ以上長くなると、読者から『読みにくい』『何を言っているか、わからない』とクレームが来てたいへん。

でもたしかに二〇〇字だとほとんど何も書けないから、『この春はベージュのリップグロスが大ブレイク！ ハリウッドセレブの誰々もヨーロッパの王族の誰々も、みんなこの色に夢中！』みたいに情報を並べるだけで、おしまい

になっちゃう」

私は、さらに笑われるのを覚悟できてみた。

「でも、そもそもなぜページが流行るのか、みたいな説明もしないで、ただ「ページが人気」と書くだけじゃ、かえって信用してもらえないんじゃないの？」

C、その知人は言い切った。

「そんな背景とか理由なんて、どうでもいいの。もし書いたとしても、誰も理解しようとしなないし。むずかしいことなんて、誰も考えたくないし、興味もないの。問題なのは、この春に何色の口紅を買えばいいのか、ただそのことだけなのよ」

薄々、気づいてはいたものの、⁴文字の世界で何かが変わっている、⁵ということを私は強く感じ、ちょっとした衝撃を受けた。

それにしてもなぜ、雑誌を読む人たちが「ひと息で読めるのは八〇〇字」だったのが、「ひと息二〇〇字」になってしまったのだろうか。

どうして、「理由や背景などどうでもいいから、どうすればストレスが解消されるのか、この春に流行る口紅は何色か、その結論部分だけを教えてほしい」と求めるようになってしまったのだろうか。

D、この傾向は簡単に読めるファッション雑誌や生き方雑誌に限ったことではなかった。

一 中 略 一

約三〇編の名作のあらすじだけを集めた『あらすじで読む日本の名著』といった本も大ヒットし、この本はシリーズ化までされて、「一冊で読む」など類似本も多数出た。またこの傾向は出版だけに限らず音楽の世界にも広がり、「さ

わりで聴くクラシック」「サビで聴くモーツァルト」といったシリーズが次々、生まれた。

企画者としては、「これを参考に気に入った作品を見つけ、じっくり読んだり聴いたりしてほしい」という思いなのだろうが、「あらすじ本」や「サビだけCD」のヒットに見合うほど、夏目漱石の全集やベートーベン作品集などの売り上げが上がった、という話は聞いたことがない。多くの人は、あらすじやサビで十分、その作品を知ったような気になり、もうそこで満足しているのではないか。あるいは、「夏目漱石くらい読んでおかなければな」と思いついながらも、「あんなに厚い本を読む気にはならない」と手を出せずにいる人たちに対して、こういった「あらすじ本」はうってつけだったのだろうか。

それにしても、なぜ「あらすじ」や「サビ」でけっこう、それ以上はいらない、あるいはむずかしすぎて受けつけない、という人たちが増えているのだろうか。これも、「高齢化社会」のひとつの影響なのだろうか。

もちろん、高齢になって厚い本、長い音楽に耐えられない、という人が増えているのも事実だろうが、これらの「あらすじ本」の読者は決して高齢者ばかりではない、と編集者から聞いたことがある。「なぞる本」も同様、当初は年齢の高い読者を想定していたのだが、ふたを開けてみると三〇代、四〇代の読者が意外なほど多かった、とのことだ。

よく言われることだが、いま六〇代から八〇代のいわゆる高齢者と呼ばれる人たちの多くはむしろ向学心にあふれ、むずかしい本も読めば難解な哲学の講義を受けにカルチャースクールに通いもする。電車で、昔の活字の小さな時代の文庫本を熱心に読む老紳士の姿も、しばしば見かける。

そう考えると、「字を大きくして」「中身を簡単にして」と望んでいるのは、実は高齢者ではなくて、若い人たちなのではないか、という気もしてくる。実際に冒頭に述べたように、若い女性が読む雑誌でも「かつては一テーマ八〇

○字、いまは二〇〇字」というように「簡略化」が進んでいる。この人たちに關しては、視力が低下しているわけでも長い文章を読む体力がなくなっているわけでもないことは、明らかだ。

(二〇〇七年 香山 リカ『なぜ日本人は劣化したか』講談社)

〔注〕ライター…文章を書くことを職業とする人。著作家。

サビ…楽曲の聞かせどころ。

問一 A Dに入る言葉の組み合わせとして適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア A しかし B すると C しかも D ところが
- イ A ところが B しかも C すると D しかし
- ウ A すると B しかし C ところが D しかも
- エ A しかも B ところが C しかし D すると

問二 傍線部1「それでいいのだろうか」の「それ」、傍線部2「これでいいのだろうか」の「これ」は、それぞれどのようなことを指していますか。次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分で書いたストレス解消についての文章。
- イ 担当編集者による書き直しの指示。
- ウ 締め切り期限の心配。

エ 簡潔にまとめられた二〇〇字程度の原稿。

オ ストレスの定義やそれが起こる理由のみの文章。

カ 原稿の分量の勘違い。

問三 Xに入る語句として適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア この特集にびつたり原稿を書いていたが、ありがたうございました
- イ 少し説明が足りませんが、字数に制限がありますのでこれで結構です
- ウ 肝心な情報のみ文章ですので、二〇〇字ちょうどですみました
- エ 背景や理由の説明もあり、読者にも抵抗がないでしょう

問四 傍線部3「それ以上長い、起承転結があるような原稿は読者に読まれない」とありますが、「読者に読まれない」原稿を具体的に示しているところを文中から一文で抜き出し、初めの十字で答えなさい。

問五 傍線部4「文字の世界で何かが変わっている」とありますが、これは出版界の中での常識の変化をあらわしています。何がどのように変わったのですか。具体的に説明しなさい。

問六 傍線部5「ちょっととした衝撃を受けた」とありますが、どのようなことに「衝撃を受けた」のですか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 文章が長くなると、読むことに飽きてしまい、結論ばかり知りたがる読者の現状。
イ 読者は初めから読まないだろうと思いつつも、分量の多い記事を編集してしまう出版社の現状。
ウ 雑誌の原稿締め切りの期日を守るために、短めの文章しか認められなかった筆者の現状。
エ 執筆料を稼ぐために、多くの記事を長い分量で書こうとするライターの実状。

問七 傍線部6「この傾向」とありますが、この傾向を言い換えている三字の言葉を抜き出しなさい。

問八 本文の内容に合っているものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 最近の読者はものごとを感覚でとらえ、理屈や成り立ちといった過程よりも好みか好みではないかを瞬時に判断する傾向にある。

イ 最近の読者はものごとを理屈でとらえ、あること背景などを徹底的に究明し知識を豊富にしたがる傾向にある。

ウ 最近の読者はものごとを単純にとらえ、事が進行して行く順序や途中の経過には興味をもたず、必要な情報だけを得ようとする傾向にある。

エ 最近の読者はものごとを映像でとらえ、書籍等の活字を読むよりもインターネットなどの電子機器類から知識を得る傾向にある。

二

次の文章は、佐藤多佳子作『五月の道しるべ』の一場面です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

小学一年生の「私(伊山佳奈)」は、五月のある日、学校帰りにまだ通ったことのない新しい道を見つけた。その道は、家とは反対の方角に続いていったが、その道を進んでいくと、色あざやかなたっくさんのつつじが咲いていた。

本当に長い間、私は息をつめて、二列のつつじの群れをながめていた。新しい道。美しい道、つつじの道。

やがて、じっと見ていることにあきると、私は花が欲しくなった。原っぱや道ばたの雑草以外は、取ってはいけな
いと教えられていたので、つつじも手を出してはいけな花なのだ。でも、私も友達も弟の進すすむも、ちよいちよいつ
つじの花をむしりとしては、ラッパのように口にくわえ、おしりの部分のかすかに甘いミツをすうのが好きだった。

ア 一個二個三個取っても、誰にもわからない。

イ つつじはどこにでもある。

ウ 実際、見とがめられることは、まずなかった。

エ 花もたくさんつく。

オ 七歳も六歳もそう考えた。

私は一番おしげのない感じのオオムラサキをつんだ。ほんのちよつとだけ、チュツと甘く、すぐに味のしなくなる花。つつじのミツをすう時は、絶対に一つだけではすまなくなる。私は次々にオオムラサキをむしっては、味見をし

てすてた。そんな風に、短いつじ並木の中をはしからはしまで歩いてしまった。

¹何気なく、ふりむいた私は、オオムラサキの花が点々とつながる、濃い桃色の道しるべに目を見はった。へびのよううにきまぐれな曲線だ。左右の花をつんで、私がちよこちよここと歩いた道を、ピンクの線がなぞっている。

私は胸がどきどきした。自分がやったことではない気がした。証拠を残したなと思った。

(どうしよう)

このままにしておいたら、誰か大人がやってきて、花をつんだことを怒るかもしれない。でも、ひろってしまおうはいやだった。知らない間に出来た花の道しるべは、どうしようもなく、私をわくわくさせたのだ。何か特別な意味があるような気がした。たとえば、物語の中の大好きな人達を、ここに連れてきてくれるような……。

私はすっかり夢中になった。

もつともつと、きれいにしよう。誰もがあつと言うほどきれいな道しるべを作ろう！

オオムラサキの花をきちんとふせて置き直す。淡いピンクのアケボノをちぎって、オオムラサキの花の間にいれてみる。道のはしまで走って様子を見る。

うん。なかなか。でも、もうちよつと。

キリシマもたくさんつんだ。薄い黄色のヒカゲツツジも並べてしまった。

道しるべは、まるで美しい花のくさりのように、その世で一番かわいいへびのように、舗装道路の上に横たわった。

私はながめて満足した。

午後の日がだいぶ傾いている。建物のかげがどっしり道に広がって、花の色をなんだか寒い感じにしている。²A

—36のベージュの壁は西日を受けて、やけに赤っぽく見えた。私は放り出したランドセルを背負った。急に家が恋しくなった。

何かに熱中していて、思いがけず時間がたってしまったことに気づくと、いつもちよつとだけこわくなる。A棟の建物や人のいない道がひどくよそよそしく見え、帰ろう、さあ帰ろう、と胸の中で号令をかける。

だが、なかなか動けなかった。この道しるべ、そのすばらしい花の道しるべを残していくのがつらいのだ。

「ごめんね。帰らなきや。明日、明日、また来るから」

道しるべに話しかけたが、明日まで、花の列はそこにあるだろうか。じっとしていてくれるだろうか。

³私はいいいことを思いついた。

「家まで、つれていったげるよ！」

C-3の505号室まで、道しるべをつなげればいいのだ。誰かが、これを見てやってくるなら、当然、伊山佳奈の家まで来なければならぬ。誰か？ 誰？ 誰だろう。すてきなお客さんがいい。五月のすてきなお客さんにきまつてる！

私はスカートのすそを持って、つつじの花を手当たりしだいにつんでいった。もう色は何でもかまわなかった。たくさん、たくさん数があるのだ。別れ道や曲がり角に、ちゃんと置いていけるだけのつつじが必要だった。

最初に音がした。私はあんまり夢中になっていたの、そのすさまじいガラガラが自分のそばに近づくまで、気づきもしなかった。⁴ガラガラガラガラ。道路を車輪がこする音。普通の自転車なら、あんなにうるさい音はたてない。ガラガラガラ。まだ自転車に乗れないチビがつけている補助輪のひびきだった。

私はふりむいて、弟の進が、真新しい補助つき自転車で、つつじの道しるべをひいていくのをじっと見ていた。なぜか、声をたてることができなかった。

大小四つの車輪が、濃いピンクや薄いピンクや朱色の花を次々とふみつぶしていく。私は自分の胸がつぶれるような思いがした。道しるべがこわれる！

進は私に気がついた。

「あつお姉ちゃん……じゃなくて、カーナ^{*}」

彼は感心にも私をカーナと呼んだ。大きな黒目がうれしそうに光っている。進もまた、親の言いつけを破り、一人でこんなに遠くまで来ていたのだ。だいが心細かったところ、思いがけず私を見つけて喜んだのかもしれない。

だが、私は返事をしなかった。進は、私が手をはなし、スカートから足元にこぼれ落ちたたくさんのつつじの花をまじまじと見た。

「ああ、あーあ……」

「いっけないんだつと言おうとしたのだろうが、その前に私はおんおん泣きだしていた。」

「こわしたあ、こわしたあ、進のバカあ」

弟は自転車にまたがったまま、ひどくおびえた顔をした。でも、私は彼を指さして、泣きながらどなった。

「あんたが悪いのよ。直してよ。もどおりにしてよ」

進は自転車がふみにじった花の道しるべと私の顔をかわるがわる見比べた。そして、自転車をおりると、道に散らばったつつじの花を一つ二つひろい上げて、また私を見た。

「直してよ！」

私はさげぶ。一度かんしゃく玉がはれつすると、とことん泣きさげぶのが私のくせだった。

大切な花の道しるべ。あんなきれいなものの上をどうして自転車で走ることができるのだろう。なんでこんなバカな弟がそばにいるのだろう。急に冷たく強くなった夕方の風が、車輪にひかれた花の列をいよいよバラバラにこわしていった。

私は泣きながら自転車を足でつけた。進の補助つき自転車。あのいまましい新品の自転車。がしんと耳ざわりな

音がして、自転車はよるめいたが、三十センチほど地面をすべっただけで、たおれなかった。

進は怒りもせず、ますます大きく目を見開いた。やがて、彼は道に散らばったつつじの花をひろい集めて、自転車のかごに入れた。つぶれた花も、無事だったものもおかまいなしにどんどんひろっている。自転車をそのままにしてじぶんがちよこまか動きまわるため、全部の花をひろってしまうまでにはずいぶんと長い時間がかかった。

かごにぎつしりつめこまれた明るい色の花たちは、夕ぐれの光の中でくるぐろとして見える。私は、そのもっそりとした不気味なかたまりから目をそらした。それは、つつじでも道しるべでもなく、私のぜんぜん知らない不吉でいやなものだった。

(二〇〇七年 佐藤 多佳子『サマータイム』新潮文庫)

〔注〕*オオムラサキ……つつじの種類の一つ。後に出てくる「アケボノ」「キシマ」「ヒカゲツツジ」も同様。

*A—36……団地内の建物につけられた番号。「A36号棟」の意味。なお、「私」はC—3の505号室に住んでいる。

*カーナ……「私」は、自分の名前に飽き足らず、一つ違いの弟に、むりやり「カーナ」と呼ばせていた。

*あのいまましい新品の自転車……「私」は、誕生日に弟が新しい自転車を買ってもらったことに不満だった。

問一 文中のあくオの各文を、意味が通るように並び替えなさい。

問二 二重傍線部「つんだ」の「だ」と同じ性質のものを、次のあくエの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 外は雨が降っていたので、彼の家にみんなで集まって本を読んだ。
イ いつも通る道は工事をしているので、こっちの道を通れば安全だ。
ウ もし晴れば運動会だったのに、雨で中止になって残念だ。
エ 今日は十五夜なので、今夜のお月さまはまんまるだ。

問 三 傍線部1「何気なく、ふりむいた私は、目を見はった」について、次の各問いに答えなさい。

① この部分を中心とした「私」の気持ちの説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 偶然できあがったつつじの道しるべを見てびっくりするとともに、自分にこんな美しいものを作る才能があったということが信じられず、とまどっている。

イ 軽い気持ちでしたこととはいえ、学校のきまりに反してつつじの花をつんでしまったことを後悔し、一刻も早く道しるべを処分してしまおうとあせっている。

ウ 思っていた以上に美しくりっぱな道しるべができたことに満足し、多少の罪の意識は感じているものの、もっときれいなものを作ろうと、いつそやる気を出している。

エ 大それたことをしたことに基づき、不安を感じている一方で、思いがけずできあがった美しい道しるべを壊してしまうことにはなんとなく抵抗を感じている。

② 「目を見はる」とは、「驚いたり感心したりして、眼を大きく見開く」という意味です。それでは、次の「目」という語を用いる慣用句を完成させるために、空欄に指定された字数の言葉をひらがなで入れなさい。

A 僕の姉は、甘いものには目が（ 二字 ）。「たいそう好きであるようです。」

B 最近の彼の振る舞いは、目に（ 三字 ）。「あまりにもひどく、だまって見ていられない。」

C 頂上からの美しい風景に、目を（ 五字 ）。「すっかり見とれる。」

問 四 傍線部2「花の色をなんだか寒い感じにしている」について、次の各問いに答えなさい。

① 「寒い感じ」という表現には、たんに「花の色」の説明だけでなく、「私」の気持ちも込められているように思われます。それでは、この場面での「私」の気持ちを具体的に表わした部分を、文中から十字で抜き出さなさい。（ただし、句読点は含みません。）

② この部分と同じように、「私」の気持ちとつつじの花の色を関連つけて表現している部分が他にもあります。それを文中から一文で抜き出し、その初めの五字で答えなさい。

問 五 傍線部3「私はいいいことを思いついた」について、次の各問いに答えなさい。

① 「いいい」と「とはどのようなことですか。これを説明した次の文の空欄A・Bに入るべき言葉を、文中から指定の字数で抜き出して答えなさい。

せつかく作った道しるべを残して帰ることが（ A 三字 ）と感じた「私」は、道しるべを自分の家まで

（ B 七字 ）と考えた。

② ①で答えた「とが、なぜ「いいい」と」なのですか。本文の内容にそって、自分の言葉で説明しなさい。

問 六 傍線部4「ガラガラガラガラ」という音はどのようなことを表していると考えられますか。その説明として
適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あまりにも突然で、どのように対処していいかわからない「私」の不安を表している。

イ 自分の世界の中で楽しんで「私」を現実の世界に引き戻す役割を果たしている。

ウ 弟が「私」にとって自分の世界を次々と破壊する者であることを暗示している。

エ それまでの静かな「私」の感情が激しいむき出しのものに変化するきっかけとなっている。

問 七 傍線部5「いつけないんだ」と言おうとしたのだろうが」とありますが、「進」はどういうことについて「いつけないんだ」と言おうとしたと考えられますか。簡潔に説明しなさい。

問 八 傍線部6「進は自転車がまた私を見た」とありますが、このときの「進」はいつたいどのような気持ちだったと考えられますか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一人ぼっちで家から遠く離れたところまで来てしまい心細く感じていたところに、思いがけず姉の姿を見つけた安堵した。けれども、その姉が急に自分を非難するように叫び出したため、訳がわからずどうして良いか困惑している。

イ 進としては、姉が苦勞してつつじの道しるべを作ったことがわかっているだけに、取り返しのつかないことをしたと感じている。また、それに加えてあまりの姉の嘆きようからも、自分の犯した過ちの重大さを感じ、呆然としている。

ウ 進もまた、つつじの花に誘われるように思わず遠くに来てしまったが、姉のやりすぎた行為を見ておおいに驚

き、とがめようとした。ところが、自分の罪をごまかそうと必死になっている姉の姿を見て哀れに思い、同情を寄せている。

エ 新品の自転車を買ってもらったうれしさから、つい調子に乗ってつつじの花を踏み散らしてしまったが、姉の落胆した様子を見て、ふと我に返った。そして、たしかに悪いのは自分の方だったと気づき、心から反省している。

問 九 傍線部7「それは、つつじでも道しるべでもなく、私のぜんぜん知らない不吉でいやなものだった」とありますが、このときの「私」の気持ちを説明したものと最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の思いつきに興奮しながら道しるべを作っていた「私」ではあったが、弟に道しるべを壊されたことで我に返り、あらためて自分が多くのつつじをつんでしまったことに気づいた。そして、そんな自分の行いに対して、なんらかの罰が当たるのではないかという、子どもらしい不安におびえている。

イ 思いがけずたくさんのつつじの花を見つけたことで感情が高ぶり、夢中になって道しるべを作ったが、弟にそれを壊されてしまうと、それまでの熱もいっぺんに冷めてしまった。そうした激しい感情の落差ゆえに、つまれつつじを見るのが不快で、それらが自分とは無縁なものに思われてくる。

ウ それまでは夕ぐれにまぎれて気がつかなかったが、枝からつんだつつじは急激に色あせてしまい、よく見ると最初のみずみずしさが薄れて醜くなっていた。しかも、それらを見ると、なんだかつつじの花にまで裏切られたような気がしてきて、それまで以上に弟に対する怒りが強まっている。

エ 弟の出現によって、つつじの道しるべが台無しにはなったものの、それでも新たに作り直すことはできたはず

である。けれども、一度かんしゃくを破裂させた手前、今さらつつじを拾いなおすこともばつが悪く、弟に対する面当てもあつて、無理にでもつつじを不吉なものだと思ひ込もうとしている。

問 十 この文章の表現上の特徴を説明したものととして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 会話文を中心とした表現をとることによって、まるでドラマでも見ているかのように、登場人物が生き生きと行動する様子が伝わってくる文章である。

イ 色とりどりのつつじの花の描写を詳しくすることによって、深刻な場面を描きながらも暗さを感じさせず、華やかな印象を感じさせる文章である。

ウ 全体を通して短い文を重ねて表現することで、テンポよく物語が進行しており、読み手を自然に物語の世界へ引き込んでいくような文章である。

エ ところどころに「五月」という季節を表わすための比喩表現が効果的に用いられているため、主人公の特異な行動も、違和感なく受け入れることのできる文章である。

三

次の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- 1 ヒグラシの声にカンショウ的になる。
- 2 登頂の感動をハイクによむ。
- 3 救援物資をユウセン的に送る。
- 4 ケンエイ運動場で大会が開催される。
- 5 川のリュウイキにアシが自生する。

四

次の傍線部の漢字の読みをひらがなで記しなさい。

- 1 事務所を根城に活動する。
- 2 新勢力が台頭する。
- 3 大雪警報が解除される。
- 4 日本海沿岸の漁場。
- 5 月探査機を打ち上げる。

問題はこのページでおしまいです。